

PHOTO ESSAY

西条キャンパスの自然(動物)

-15-



総合科学部
情報行動基礎研究講座

渡辺 一雄

なんと西条キャンパスにギフチョウが

ギフチョウとサンヨウアオイ

Luehdorfia japonica and *Heterotropa hexaloba*



角脇川渓谷のぶどう池畔で最初に発見されたギフチョウの卵塊。サンヨウアオイの葉裏に産みつけられている。



左の拡大写真

ギフチョウ成虫

ギフチョウは、美姫タイスの名を得て南欧の春四月に舞う妖艶なタイスアゲハに近縁の美しい蝶で、日本の特産種です。やはり年一回、桜の開花の頃に姿を見せ、マスコミには「春の女神」ともはやされ、環境庁の指定昆虫として開発時にはまず保護が優先されます。そんなギフチョウがこれほど開発の進んだ西条キャンパスにいたのでしょうか。

さらに事情通なら、幼虫の食草のカンアオイ類は分布拡散が極度に遅い植物で、山地の基盤岩地帯とその辺縁に生育するため、かの有名な西条湖成層を残した湖に水没していた西条盆地にあるはずがない、従ってギフチョウもいるわけがないと考えるでしょう。事実、西条には蝶も食草も全く記録を欠いていたのです。

ところがこのギフチョウが平成三年春、工事中の理学部屋上で理学部S教授の、平成五年春には思案橋付近で総合情報処理センターNさんの目前に「一瞬の影」を見せたのです。私は二度とも言下に「春型アゲハの小型個体の見間違いでしょう」と反応しています。さすがに二度目は胸騒ぎを抑えながら。

平成五年秋、多くの新分布地を開拓した敏腕ギフチョウ採集家の理学部S君が、ブドウ池畔にカンアオイ類の一種サンヨウアオイの発見を伝えました。早速かけつけ、乱開発の脇のわずかな手つかず斜面に数株を認め、さらに上流と下流の自然斜面に点々と自生を確認しました。

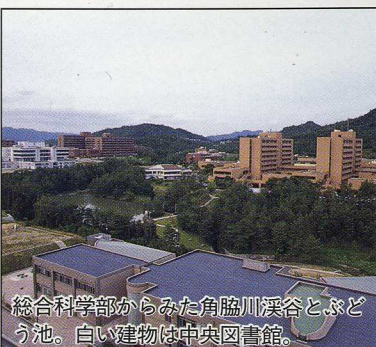
全く意外な分布です。以来この地を眺めては考え込みます。二体どこからきたんだ。角脇川による河川伝播としても、最上流は貧弱ながら山と鏡山じゃないか。それにしても自生地はまさに基盤の花崗岩と西条湖成層の接点だな。なんとすごいし、がみつきたのだ。

本学部のK助教授がヒントをくれました。「八本松の南の曾場ヶ城山は恐ろしく崩壊が速く、大量の土砂を西条盆地に提供しながら想像以上のスピードで西に退いている」と。ちなみにこの山にはサンヨウアオイが多く、ギフチョウ卵も確認しています。西条のサンヨウアオイの分布拡散は意外に足早なのか。

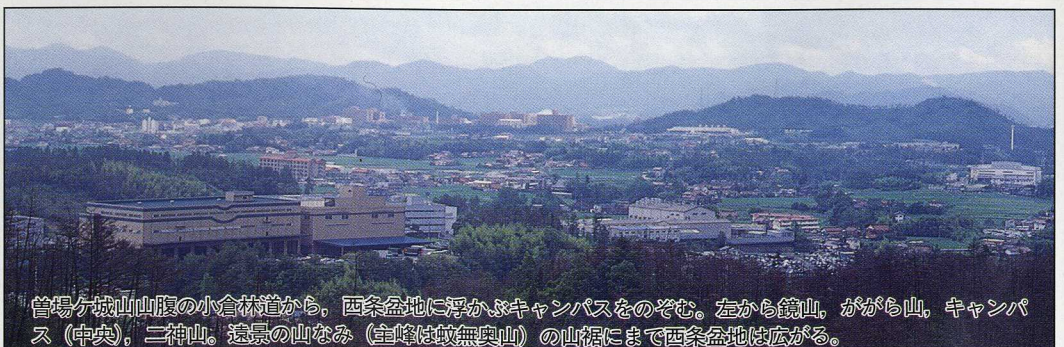
ついに平成六年春、S君は最初のサンヨウアオイ付近を飛ぶギフチョウを発見、産卵まで観察しました。私もこの上流の理学部付近で卵と幼虫を認め、今春は成虫も目撃しています。やはりいたのです！自然は素晴らしく奥深く、ヒトの浅知恵をいつも冷やかに拒否します。

西条キャンパスでは、角脇川の渓谷の自然を残した開発がギフチョウ個体群をkarouじて残していたのです。ただ、私にはこの狭い一隅だけで個体群が維持できるとはとても思えません。ここは複数のパッチ状発生地の一つで、きっと近くに未発見の食草と発生地がまだ複数あり、蝶はこれらを行き来しながら小規模な「メタ個体群」をぎりぎり維持しているかと推定されます。

政令指定都市圏ではギフチョウは神戸市、名古屋市で昭和四十年代に絶滅、現在なお生息しているのは広島市と京都市だけです。ギフチョウが飛ぶ広島大学なんて素晴らしいではありませんか。(わたなべ・かずお)



総合科学部からみた角脇川渓谷とぶどう池。白い建物は中央図書館。



曾場ヶ城山山腹の小倉林道から、西条盆地に浮かぶキャンパスをのぞむ。左から鏡山、ががら山、キャンパス(中央)、二神山。遠景の山なみ(宝峰は蚊無奥山)の山裾にまで西条盆地は広がる。